

若者へのメッセージ 48

能楽師狂言方 大藏流 大藏彌太郎

【第一回】狂言の精神を伝え、繋げる

ほとんどの日本人が歌舞伎のことは知っていても、能楽（能と狂言）はそれほど認知されていない。戦後さまざまな娯楽が増え、価値観が大きく変わった激動の時代、私は、学校から帰れば狂言の稽古、休日は能楽堂で舞台に立ち、学校では友人たちに狂言を稽古していることを隠して育った。

狂言を伝える家

時代は昭和49年。私は能楽の狂言を代々伝える大藏家に生まれました。戦禍を生き「乱れる盛んになるよりは、固く守って滅びよ」「和をもって貴しとなす」という家訓を胸に、「正直の頭に神宿る」という信念をもった実直かつ厳格な祖父（大正元年生まれ、故二十四世宗家大藏彌右衛門虎智）と、戦後の「狂言ブーム」のようなものはあったものの……テレビや映画などの娯楽もどんどん増え、政治や文化、生活

や価値観なども大きく変わった激動の昭和に生まれた父（昭和24年生まれ、現二十五世宗家大藏彌右衛門虎久）から狂言の教えを受け、自身も能楽師狂言方として今日に至ります。

小学生の頃は、学校から帰れば狂言のお稽古、休日は能楽堂で舞台という日常。特殊な環境ではあったものの、祖父の家は古い書物が山積みになった小さな家。父の住まいは2Kの賃貸アパートで家族4人（父母私弟）暮らし。狂言をやっている以外は特別な事はなく、テレビを見たり近所の友達と平凡に遊んだりしていました。

大藏彌太郎 千虎（おくら・やたろう・せんとら）

能楽師狂言方 大藏流

公益社団法人能楽協会理事、一般社団法人狂言大藏会代表理事

1974年12月生まれ、東京都出身。二十五世宗家大藏彌右衛門虎久の長男。重要無形文化財保持者（総合認定）。祖父（故）二十四世宗家大藏彌右衛門虎智および父に師事。本名、基照（もとみつ）。

1979年、狂言「以呂波」シテにて初舞台。「那須」「三番三」「釣狐」「花子」を披露。1998年、宗家に伝わる幼名・千太郎を襲名。2016年、成人名・彌太郎を襲名。代々の名乗り「虎」の名を千虎とする。各能楽堂公演に出演。『狂言大藏会』『狂言わらんべ』『ももやそ狂言』などの公演を主催。各地で学校公演や狂言教室を開催。東京、千葉、宮城に稽古場を主催。東京都・アーツカウンシル東京・（公社）芸団協主催『キッズ伝統芸能体験』にて指導。2020年、動画投稿サイト「ユーチューブ」チャンネル「ももやそ狂言」開設。

舞台以外の主な出演に、2012年、NHK土曜ドラマスペシャル「負けて、勝つ」戦後を創った男・吉田茂、昭和天皇役。2018年、NHK Eテレ『マリーの知るところ！ ジャポン』出演および狂言指導。





「三番三」左：父（二十五世宗家虎久）、中央：筆者、右：祖父（二十四世宗家虎智）

江戸時代には幕府の式楽として定着した室町時代から続く能楽（当時は猿楽）ですが、「ほとんどの日本人が、歌舞伎の存在はなんとなく知っていても、能や狂言はまったく知らない」という時代に突入し、華やかなショービジネスではない狂言の精神を変えずに、その教えをどう伝え、繋げるべきか、父も相当に悩んだ事だと思います。

祖父に隠れてエレキギターを弾く

能楽の公演はテレビでは宣伝されませんし、芸能事務所に所属して役者やタレントとしての

活動をしなければ、能楽師が有名人になるような事はなかったように思います。今のようインターネットなどもなく、殆どの学校教育では詳細な「日本文化の学習」は行われていないわけですから、学校の先生も知らない。学校に行っても先生にも理解はしてもらえず、狂言を稽古している事は友達にも隠していました。

中学三年生の時、年号は「平成」となり、やがてバブル経済も崩壊。消費税3%が導入され、世の中の景気も下がり、高校時代の生活はよくわからずに彷徨っていたように思います。スポーツは怪我をすると舞台に影響がでると言うことで部活動に打ち込んだ記憶はなく、中学から独学で覚えていたエレキギターで、当時のブームのついで友人とロックバンドを組んでいました。もちろん狂言の稽古はしますし、舞台も勤めます。が、ギターは祖父には隠していました。狂言には関係のないような事も、私の時代では自分を守る上で必要なものだったように思います。やがて成人（20歳）になり、周りの友達就職難の氷河期。自分が何者でどう生きるべきか？ どう社会とかかわっていくのか？ といったことを考えたのはこの頃でした。

変わりゆく時代に「狂言」を伝える難しさ

祖父の生きた時代と、父の時代もまた違う。

それでも、「狂言の教え」というのは今の時代にも変わらずに生きています。

「どのように子に教え、育てるか？」

変わりゆく時代の価値観は、祖父や父にとっても大変な事だったと思います。どんなに裕福な時代や環境に生まれても、悩みや苦勞、重圧や不遇はあるものです。逆に言えば、どんなに辛い時代や環境に生まれても、必ず生きる道筋はあるものだと思っています。

勉強して苦勞して新しい事を覚えると、新しい楽しみや喜びと出逢うことができます。いつも優しい気持ちで過ごす事が一番良い事ですが、時代を生きていく上では、勇む気持ちも必要です。勇気を持って扉を開くことで喜びや安心を覚え、たくさん事を思っ、考えて、時に悲しみ、苦しみ、また勇み、喜び、思い……。赤ちゃんは産まれてまず泣くことが始まりです。生きるって、まずは声をあげることですかね？

いよいよいろいろな事がAI（人工知能）管理になった令和。ロボットのシステムの下で生きるより、私たち人間はもっと感情豊かに、人と人を大切に、また新しい時代の子どもたちにも心を繋いで、優しい気持ちで暮らしていきたいと思っています。

温故知新。以心伝心。日々精進。